

名句と春

齡を重ねて、今年もまた京都に出かけて花見を楽しもうかと思うにつけ、さて来年はどうやら、あと何年春を楽しめることができるやろかとの思いがよぎる。「月日のゆくをさへなげくをとこ（伊勢物語）」との老境に共感する今日この頃ではある。

この国に生れて幸せであったと思うのは美しい四季に出会えたことである。先人たちもこれを思い、俳聖芭蕉は四季を愛でる俳句と称する詩文を完成させた。

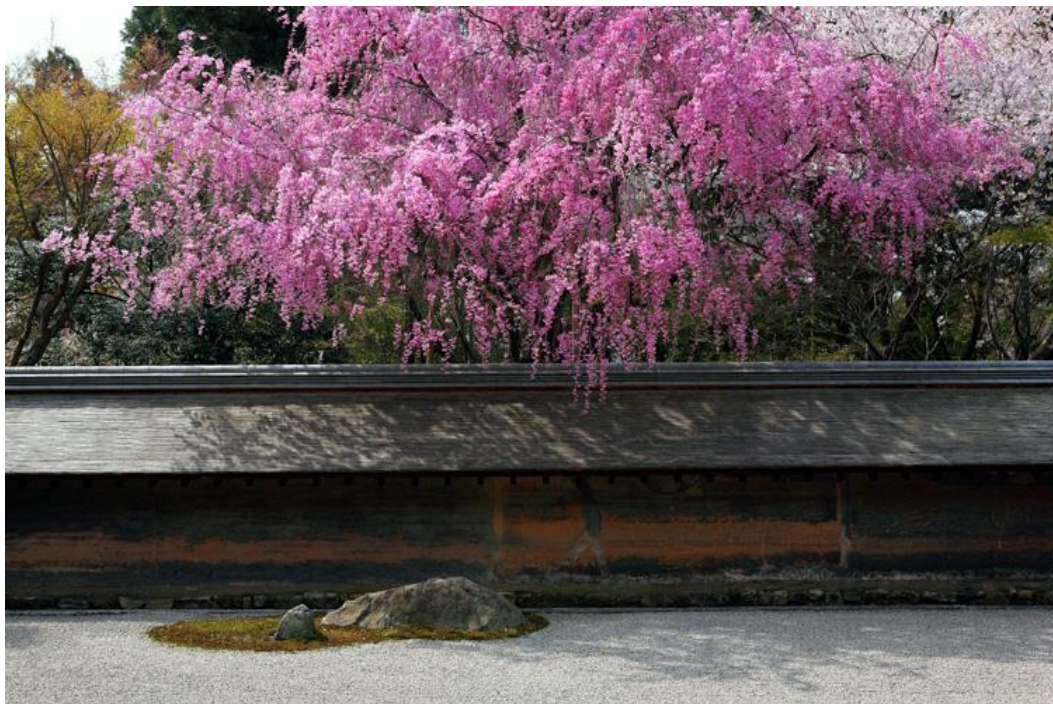
名句によせて心に浮かぶまま春のおもいを綴ることとする。

1、「この庭の遅日の石のいつまでも」高浜虚子

竜安寺の春、遅日（ちじつ、春の日）の光を受けて永劫微動だにすることのない石庭。自分もこのままいつまでも凝っとしていたい気持ちにかられる。石庭の四季の移ろいの中でも春は特別である。庭に入った瞬間ハッと息をのむ眺めが開けている。正面の土塀のすぐ向こうにある枝垂れ桜が今を盛りと咲き乱れているのである。冷たく無機質な石と砂、片や春暖一瞬の桜花の華麗さの対比、この季節ならではの巧まざる自然の演出に感動する。学生の頃は拝観者もいるかいないかと言う静かさであったが、近頃は団体さんも多く「どこから眺めても15の石の1つは他の石に隠れて見えない配置になっています」などとつまらない案内で縁をあちこちと移動するものだから、拝観者が絶える一時の静けさが本当に有難く思える。それでも平日の閉館1時間前頃に入ると遅日の静けさを味わうことができる。閑雅の思いに浸った後、境内鏡容池池畔の西源院であつ爛と湯豆腐でも楽しめたらもう言うことはない。

石庭の春の名句をもう一句。

「方丈の大庇より春の蝶」高野素十



2、「公達（きんだち）に狐化けたり宵の春」 与謝蕪村

清少納言は「春はあけぼの」と書いているが朝寝坊の私にはピンとこない。春は宵。家に籠っていても夜雨がしとしとと降り、濡れた若葉が揺れている庭を見ていると、何とはなしにこの瞬間をいとおしむ気持ちになる。

高台寺の夜桜を楽しみ、「ねねの道」を北へ少し歩けば丸山公園の絢爛たる夜桜。ここから西へ八坂神社の楼門から四条通りに出て、花見小路を左にとり祇園町を歩く。大抵、お茶屋まわりの芸子はんや舞妓はんとすれ違う。夜目に遠目に傘の下、ましてや夜目でなくても美しい彼女らの着物姿に出逢うと本当に「狐が化けてるのやろか」と疑いたくなる。

蕪村の春の句をもう一句

「遅き日のつもりて遠きむかしかな」

3、「春惜しむおんすがたこそとこしなへ」 水原秋桜子

奈良の仏、特に白鳳仏なかんずく聖観世音菩薩。薬師寺東院堂を訪ねて初めて美しいお姿にお目にかかった時の胸のときめきを忘れることができない。それから幾度お目にかかっただろうか。晩春の夕日が堂内に差し込み、お姿が匂うように輝く瞬間、とこしなえにとの祈りがわき出てくる。実はこの句には、「百済観音」という前書きがある。秋桜子の捧んだ「おんすがた」は法隆寺の飛鳥仏だったのだ。このような抒情詩は作者から一旦離れた後はこれを読む人の主観にゆだねることが許される。蛇足ながら一言。



祇園の舞妓はん



聖観世音菩薩

4、「葛城の山懐に寝釈迦かな」阿波野青畝

葛城古道を訪ねたのは数十年前の春。古事記、日本書紀において系譜は存在するがその事績が記されない第2代綏靖天皇から第9代開化天皇までの8人の天皇（欠史八代）の中、幾人かの御陵がここにある。5世紀に活躍した豪族、葛城氏や京都の鴨氏の祖先の古墳が実体のようなものである。山里には釈迦入滅の旧暦2月15日前後には涅槃図を出す寺も多いとのこと。青畝はここで生れ育ち、昔を偲んでの発句でどの寺の寝釈迦かはわからない。

葛城古道に沿って九品寺あたりから南へ一言主神社を経て高天原神社、高鴨神社までは約10キロ。満開の桜並木、また桜の古木もあちこちに見られ、人にも殆ど出逢うことがなく、私たち一行のために咲いてくれていると思えたものだ。こんなに静かで美しい山里が未だあるのだなあと、心の故郷へ帰ってきたような気分であった。

青畝の春の句をさらに二つばかり

「ちらちらと老木桜のふぶきかな」

「なつかしの濁世（じょくせ）の雨や涅槃像」

「なつかしの濁世」とは娑婆をこよなく愛する凡人の私の心を映しているようで共感することしきりである。

5、「さまざまのこと思い出す桜かな」松尾芭蕉

しめくくりはやはり俳聖の作である。桜を眺めて私も含め多くの老人が心でつぶやく言葉であろう。平易に叙して読み手の心にひびくお手本のような作。

もしかしたら、芭蕉は尊敬する西行の桜の歌「願わくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月の頃」を思ったのかも知れない。西行は如月（2月）、望月（15日）と所望した通り、旧暦の2月16日になくなった。2月15日は釈迦の入滅の日であり涅槃会が営まれる。偶然の一致とはいえないものを感じる。

西行のこの歌は私の望みでもあるのだが、凡人がいくら願っても叶わないことは承知している。

6、「番外、法然院の春」

芭蕉、蕪村、時代が下って、虚子、虚子に師事した秋桜子、青畝、素十、の春の名句と言われるものを掲げて私のおもいを綴ってみた。実はもう一か所、春の寺として思いが残るのは法然院、椿の名所である。銀閣寺から南へ1キロ足らず。東山の山麓に建っており、総門をくぐってなだらかな石段沿いの参道左右に3月末ともなると藪椿が咲き乱れている。参道を登りきると行く手に瀟洒な茅葺の山門が現われる。絵になると言おうか何とも美しい姿かたちである。山門をくぐって池を渡り、石畳の道なりに進むと本堂に至る。本尊の阿弥陀様を拝んで目を凝らすと思いがけない光景が映しだされる。散華（さんげ）である。毎日早朝に阿弥陀様の前に季節の花、この時期は椿の花が縦横に25ヶ並べられる。

本堂北側の中庭には、三銘椿（五色散り椿・貴椿・花笠椿）が整然と植えられている。方丈の前庭は枯山水、襖絵は狩野光信。学生時代に土居次義先生（京都工芸繊維大学名誉教授、元京都国立博物館館長、1991年11月没）にこの光信の「楨に海棠図」を見につれていただ

き、奥行きのある構図、清雅な雰囲気、この絵師の代表作と語られたのを思いだす。毎月、休日に京都の寺々に連れていただき、先生は蘊蓄をご披露された。楽しくまた啓蒙を受けること大であった。(但し方丈庭園や方丈の襖絵、中庭の三銘椿等の拝観は、春は4月1日～7日の特別公開期間のみ)。観光ルートからは外れておりいつ行っても閑静である。

実はここには虚子の墓があり「念仏の法のあやめの返り花」の句碑も立っているのではあるが、どうも抹香くさくてこの句に寄せての私のおもいには繋がらないので、俳句なしの「番外」とした訳である。

東山山麓の道を銀閣寺から出発して南へ「哲学の道」沿いを歩いて、法然院、安楽寺、霊鑑寺（通常は入れない）、ここから少し西へ鹿ヶ谷道まで来たら左へとればすぐに永観堂、門前を西へ行けば南禅寺、出発点の銀閣寺と終着点の南禅寺を除けばあまり観光客にも出逢わず、約2キロの静かな道筋である。



法然院山門



本堂 散華



三銘椿

(昭35・色染 松岡謙一郎)